



評論

さとう やす まさ
佐藤 泰 正

下関市
(1917～2015)



【著作】

『近代日本文学とキリスト教・試論』
（昭和38・基督教徒兄弟団）
『文学その内なる神 日本近代文学一面』
（昭和49・桜楓社）
『夏目漱石論』（昭和61・筑摩書房） ほか

【閲覧情報】

梅光学院大学図書館に
「佐藤泰正関連資料コーナー」設置



直筆原稿

佐藤泰正

お前は何を以てみずからの詩神とするかと問われれば、私には詩神はないという。私はただ強いられてある断片、一個の破片にもすぎぬ。ただこの破片は破片たるままに、また裡なる破片のひしめきを、時にまたその痛みと破れを覚える。批評も研究もこの裡なる破片のひとつにすぎまい。破片たる以上それがどうして虚しくないことがあろう。ただ私はその虚しさを、あの究極なるものによって知る故に、なお生きつづける。私は文学のためになど生きはしない。私はただ、なおしばらくは、私の支えを待つもののためにのみ生きる。

（「文学と宗教」―その方法に関する若干の省察―
『文学 その内なる神』所収 ただし、原文の改行を行っている）

大正6（一九一七年）	昭和9（一九三四年）	昭和12（一九三七年）	昭和15（一九四〇年）	昭和20（一九四五年）	昭和21（一九四六年）	昭和25（一九五〇年）	昭和26（一九五二年）	昭和31（一九五六年）	昭和37（一九六二年）	昭和38（一九六三年）	昭和39（一九六四年）	昭和42（一九六七年）	昭和43（一九六八年）	昭和46（一九七二年）	昭和47（一九七三年）	昭和49（一九七四年）	昭和50（一九七五年）	昭和53（一九七八年）	昭和61（一九八六年）	平成3（一九九二年）	平成6（一九九四年）	平成8（一九九六年）	平成12（二〇〇〇年）	平成20（二〇〇八年）	平成22（二〇一〇年）	平成23（二〇一一年）	平成27（二〇一五年）
一七歳	二〇歳	二三歳	二八歳	二九歳	三三歳	三四歳	三九歳	四五歳	四六歳	四七歳	五〇歳	五一歳	五四歳	五五歳	五七歳	五八歳	六一歳	六九歳	七四歳	七七歳	七九歳	八三歳	九一歳	九三歳	九四歳	九八歳	

佐藤泰正 年譜

11月26日、山口県厚狭郡山陽町（現 山陽小野田市）に生まれる。旧制豊浦中学校卒業（四年修了）。第一早稲田高等学校文科入学。早稲田大学文学部国文科入学。同右 卒業。山梨英和女学校教諭となる。大阪市立西華高等学校校教諭を経て、梅光女学院に着任（11月）。日本キリスト教団下関教会で受洗。美術教師・画家森嶋京と結婚。梅光女学院中学部長に就任。詩集『夜の樹』（私家版）出版。早稲田大学大学院国文研究室委託生となる。『蕪村と近代詩』（梅光女学院）刊行。『近代日本文学とキリスト教・試論』（基督教徒兄弟団）刊行。梅光女学院短期大学副学長に就任。『文学と宗教の間』（国際日本研究所）刊行。『日本近代詩とキリスト教』（新教出版社）刊行。山口県芸術文化振興奨励賞受賞。梅光女学院大学学長に就任。大学公開講座開始。『近代日本文学・その側面―文学とキリスト教思想との受容相関をめぐる考察』によって、早稲田大学より文学博士の学位を授与。『文学その内なる神 日本近代文学一面』（桜楓社）刊行。短期大学学長を兼任。『近代文学遠望』（国文社）刊行。『夏目漱石論』（筑摩書房）刊行。『人生の同伴者』（遠藤周作との対談（春秋社）刊行。短期大学長を退任。『佐藤泰正著作集』全12巻、別巻1（翰林書房）刊行開始（平成15年まで）。第7回宮沢賢治賞受賞。大学学長を退任。生涯学習センター長就任。『中原中也という場所』（思潮社）刊行。『文学講義録 これが漱石だ』（櫻の森通信社）刊行。『文学が人生に相渉る時―佐藤泰正文学追憶75年を語る』（櫻の森通信社）刊行。『文学の力とは何か』（翰林書房）刊行。11月30日、虚血性心疾患により逝去。

佐藤泰正は、山口県の地方私学（下関・梅光学院）で教員（中学・高校・大学・大学院）として教育に力を注ぎながら、一方で、文芸評論に新しい地平を切り開き、生涯にわたり日本近代文学研究の第一線を歩みつづけた。その業績は多方面にわたるが、今や、詩の世界の芥川賞とも位置づけられる中原中也賞の設立時からの選考委員であり、日本の風土とキリスト教信仰という困難な課題に取り組みつづけた遠藤周作の最も良き理解者であったことに、その典型を見ることができよう。その基底には、大学での学びの中で（ドストエフスキイ体験）があり、それは佐藤に（神に問う人間と、神から問われる人間）という、往復的 複眼的 思考をもたらしこととなった。

佐藤の名を世に知らしめたのは、四十六歳の時の著作『近代日本文学とキリスト教・試論』である。そこには、宮沢賢治、中原中也、堀辰雄、遠藤周作、吉本隆明などの著作が対象とされているが、巻頭に置かれた「文学と宗教におけるひとつの問題」は、斯界に深い問を投げかけるものとなった。そこで取り上げられたのは、芥川龍之介の晩期の評論「西方の人」の一節である。

「キリストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地上へ登る為は無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま……。」

ここには、「神のひとり子」でありながら、地上に人間として生まれ、その宣教に理解を得られぬまま処刑されたイエス・キリストの姿が、情緒的、かつ、鮮明に描かれている。芥川は冷徹な芸術至上主義者であろうとしながらも、一方で宗教的救いを聖書に求めた。この「天上から地上に登る」という非条理的な表現には、芥川の深いキリスト理解が表現されているのだが、当時、日本近代文学研究の先導者であった吉田精一氏は、その芥川論の中で、「地上から天上に登るために」と、二ヶ所にわたって誤って引用した（角川文庫『西方の人』解説）。佐藤はこれに注目し、この誤用にこそ、日本人とキリスト教、あるいは日本の風土と宗教的倫理の本質的な問題が象徴的に現れていると指摘したのである。それは、吉田氏がキリスト教に対する本質的理解を欠きながら、芥川の苦悩をまっとうに評価できるのか、という問でもあった。

吉田氏の反論は、芥川は単に書き誤って「天上から地上へ」と表記したというものであったが、当時、作家・評論家として日本の全現実に向きあおうとした高橋和巳氏は、佐藤の論旨を深く理解し、「キリスト教の投影」という書評で次のように述べている。

『「地上から天上へ登る」と、文法的にはよりスムーズな形に逆転されたことに、キリスト教精神、キリス

トというペルソナとの対面を回避して、一般的なヒューマニズムに融解してしまった日本近代精神が象徴されている。』

「キリストというペルソナと対面する」とは、キリストによって地上の苦しみから解放されることであると同時に、キリストによって激しく問われることである。り、もつと言え、キリストに「つまづくことである」とを、高橋氏はよく理解していたのである。

佐藤は、評論家として作家とその作品を問うことは、そのまま、自己自身が問われることであり、そこで返ってくる刃によって血が流れる場所にしか、（「真実」は立ち昇って来ないことを自覚し、生涯にわたってそこには立ち続けた。それは対象を高めから批評するのではなく、対象と同伴することでもあった（遠藤周作との対談『人生の同伴者』参照。こうして、キリスト教に親和感を持てなかった夏目漱石や、放埒な人生を送ったかに見える太宰治や中原中也の内心に潜む（神との熱き問答）が、条理を尽して語られることとなった。それは近代文学研究に新しい地平を切り開き、世界の中に日本近代文学を位置づける視点を与えることになったのである。

また、佐藤の「問われる大学人」の自覚は、学問的成果を一般に開放する「公開講座」の設置をもたらし、早くも昭和四十六年（一九七二）から始まった講座の成果をまとめた「梅光学院大学公開講座論集」は、第六十五集を数えるに至っている。

『語り紡ぐべきもの―（文学の力）とは何か』笠間書院 平成三十年三月）

（文・中野新治）



著書